
香港の秋

三上夏一郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

香港の秋

【Zコード】

Z3666M

【作者名】

三上夏一郎

【あらすじ】

アレックス・リーは日本人を母を持つ香港人。テレビやCMのコンディネーターをしている。ある日リーはペニンシュラホテルでなつかしい顔に再会する。日本のテレビ局の女子アナウンサー、ユウコだった。ユウコは浮かない顔をしていた。二十代の頃はアイドル的な人気があつたのだが、三十も半ばにさしかかり、アナウンサーとしての転機を迎えているという。今回の旅行も、新番組のアシスタントを探している大物キャスターに誘われてのものだった。つまり、ユウコは暗にその大物キャスターから肉体関係を要求されてい

たのだ。リーは一計を案じ、ユウコを100万ドルの夜景が見えるピークカフェに誘う。そしてリーの機転でユウコは難を逃れるのだが、それがリーだとはユウコは知ることがなかつた。

アレックス・リーは人混みの中をひとまわりしてから立ち止り、左腕の口レックスに目をやつた。待ち合わせの時刻に五分早かつた。
皮ジャンのポケットから煙草を取り出し火をつけた。

日曜日の夕方、この時間の半島酒店（ペニンシュラホテル）のロビーが彼は好きだった。ごつた返してはいるが、集まつた人々の顔は生き生きとしている。皆ここで親しい友人や親族と待ち合わせをして、町に食事に出かけて行くのだ。

ゆつたりとした気分で煙草を吸つていると、ふと一人の東洋人の女がロビー中央の階段を早足で下りてくるのが目に入った。女は階段の途中で立ち止まり、辺りを見回す。すこしあせつている。ロビーにいる誰かを探している様子だつた。

リーは灰皿に煙草をていねいに押しつけて消すと、階段に向かって歩き出した。知つてゐる女だ、との確信があつた。
女が階段を下りくるのに合わせるように、リーが階段の下に到着する。しぜんに女と向き合ひ形になつた。

「お久しぶりです」

黒革のジャケットに真つ黒なサングラスのリーが日本語で女に話しかけた。女はすこし警戒するように彼の顔を見上げた。リーはサングラスをすり下げるときりに女にウインクした。

「ユウコさん、リーです。おぼえていますか」

「リー……？」アレックス？

女の顔に無邪気な笑顔が広がつた。ああ、そう、こんな笑い方をするひとだったな、とリーも嬉しくなる。女はやはり、一年ほど前仕事をした、日本のテレビ局のアナウンサーだった。ユウコという名前だけは覚えていた。苗字は忘れた。

「髪を切りましたね？」

「髪？ ああ……そうね」

ユウコは急に思い出したように髪に手を添えた。

「人違いだつたらどうしようかと心配でした。長い髪のあなたしか、見たことなかつたから」

「似合わない?」

「いいえ。とても似合っています」

「なにしてるのこんなところで?」

「ああ、仕事ですよ。日本のコマーシャル撮影のスタッフと五時に待ち合わせてるんですけど。ユウコさんば?」

「ええ、私も待ち合せなんだけど……」

「仕事?」

「みたいなものかな……」

その時ユウコの顔にかけりがさしたのをリーは見逃さなかつた。

「あんまり楽しいことじやない?」

「ええ……あのね」

ユウコの口が次の言葉を発しようとしたその時だつた。二人の間にスース姿の初老の男が割り込んできた。

「いやごめんごめん、地下鉄の出口で迷っちゃってね」

日本語だつた。中国人ではないようだ。男はハンカチで額の汗を拭うと、まずユウコに優しい目を向けた。そしてリーの方へと向き直る。口元に微笑は浮かべていたが、目は笑つていなかつた。

「この人、知り合いなの?」

男はユウコをかばうように前に立ち、彼女に尋ねた。長身でサングラスに革ジャン姿のリーを明らかに警戒している様子だつた。

「いえ、違うんです。あの、去年仕事した香港のコーディネーターの、リー君」

すこしあせつた口調でユウコが釈明した。

「初めてましてリーといいます」

リーはサングラスをとり、男に丁寧にお辞儀をした。

「ああ、そう? そだつたのか、なるほど。僕はまた君が何かトラブルに巻き込まれているんじゃないかなと思つて」

「彼も誰かと待ち合わせしてて偶然」

「あ、そうなの」

男の身体からすっと力が抜けたのがわかった。よつやく安心したようだつた。

「なんだ、『一ディネーターか。中国の人?』

「はい。生まれは香港です」

「日本語、上手だね」

男は日本人の誰もが口にする台詞をリーに投げかけた。
「はい。お母さんが、日本人でしたから」

「なるほど。今度香港を案内してもらいたいもんだ」

この言葉も決まって日本人が言う台詞である。しかしつたに実現したためしがない。

「じゃあ、神谷君、行こうか」

男はホテルの玄関に向かつて歩き出した。

「それじゃリー君、また」

ユウコはリーに向かつて右手を差しだした。

「はい、また」

リーは握手をするため素直に右手を差し出した。あつさりとした出会いで、あつさりとした別れだつた。しかし、握手の瞬間、ユウ

コはすつとリーを自分の方に引き寄せて、耳元で囁いた。

「あとで電話する。携帯の番号、変わつてないんでしょ

「はい」

リーはちいわくうなづいた。

ユウコが男を追いかけて小走りに駆けて行く姿を、リーは見送つ

た。すぐにユウコはぶらぶらと先を歩いていた男の腕をとつた。

「さ、行きましょう。今夜は思いつきりおいしいものを」馳走してくださるんでしょう?」

それはリーが見たこともない、ユウコの媚びを含んだ表情だつた。

仲睦まじく腕を組み、ロビーを出て行く一人をリーは黙つてみて

いた。その時、

「リーちゃん、お待たせ」

左肩を後ろから叩かれ、リーはふり返った。そこに見たのは、大きな買い物袋を抱えた、見るからに人相の悪い二人組の男だった。

「ああ。そんなに買い物しちゃつたんですか」

香港の映画俳優のようにオーバーに両手を広げながらリーが言った。

「一度、ホテルに戻りますか」

「おう、それがいいな」

年配の口ひげの男の方が、当然という口調で答えた。望月という、日本の大手広告代理店のプロデューサーで、今回の仕事の責任者、つまりリーのクライアントという訳だ。

「そうだねえ、夜は手軽なほうが何かといいよね」

望月に負けず劣らず人相の悪い、長髪の男がにやにや笑いながら言つた。進藤某といい、望月にくつついてきた若いコピーライターである。しかし若いとはいえ、下劣な品性はその顔にしっかりと表れていた。

「じゃあタクシーで香港サイドまで行きましょう。一旦荷物を部屋に置いてきてくださいよ」

リーは一人を引き連れて半島酒店のロビーを出た。

ホテルの前からタクシーに乗る。山抱えの荷物をトランクに入れ、二人を後部座席に押し込むと、自分は助手席に乗り込んだ。

窓外を、黄昏の香港の街が流れゆく。灯り始めたショッピングのきらびやかな光と、歩道に溢れんばかりの人の波。リーはこの街が好きだった。

「さあ今日行くクラブは、どんなレベルのねえちゃんがいてくれるかな」

後ろの闇から望月の野太い声がした。

「まかしてくださいよ望月さん」

できるだけ軽薄な口調でリーは答えてやつた。中国人がばかなふ

りをした方が日本人は喜ぶ。それは経験から学んだことだった。

「最近は大陸から大勢きれいどころが流れ込んでますからね。きっといい思いさせてくれますよ」

全く日本人つてやつは買い物が好きだな、と内心あきれながらリーは中国の間抜けな青年を演じていた。昼はブランド品を買いあさり、夜は女だ。

「連れ出しあはOKなんだよね？」

若い進藤が身を乗り出してきた。すでに興奮していじらしく、犬のようにハアハア息を喘がせている。

「店外デート、OKですよ。」

「ホテルなんか大丈夫？ 女の子にやばい所に連れて行かれたりしないかなあ」

「大丈夫大丈夫。その辺はママによく言つとりますから」

「あれ？ リーちゃんは最後までつき合つてくれないの？」

「進藤さん、僕の分も女買う金出して貰えるんですか？」

「いやそれは」

進藤が困ったように望月の顔を見た。

「いやいや、野暮は言いつこなし。その辺は俺たちだけで何とかなるって」

吝嗇な望月は案の定話をそらした。

「そうだ！」

突然重要なことを思い出したように進藤が叫んだ。

「やっぱコンドームなんか使つた方がいいよね、エイズとか恐いんでしょ？」

「大丈夫と思います。女たちはちゃんと持つてますよ」

その辺は極めて事務的にリーは答えた。

「でも何だか不安だからさあ、どつかで買つといつくれる？」

「わかりました」

リーは前に向き直った。二人との会話に心はなく、頭の中にはコウノの言葉がこだましていた。

「あとで電話する。携帯の番号、変わってないんでしょう？」

「いつたん一人が逗留する香港サイドのホテルに戻り、荷物を置いて、上海蟹が食べたいといつて、望月と進藤をレストランに案内した。

リー自身はあまり、蟹には箸をつけなかつた。まるで食欲がわいてこないのだ。一人をとにかく満腹にさせ、ナイトクラブに送り込んだ。カラオケと酒の馬鹿騒ぎにひと通りつき合ひ、気に入つた女をあてがい、ホテルまで送り届けると午前零時を過ぎていた。

「一ズウェイベイ
銅羅湾の通りをぶらぶらと歩いていると、携帯に着信があつた。

「もしもし。リーです」

「約束通り、電話したのよ。うれしい？」

やはりユウコからの電話だつた。声がすこし酔つている気がした。

「リー君はいま、どこ？」

「香港サイド。コーネリアス・ベイをひとり寂しく歩いてるところです」

「仕事は？」

「上がりです」

「私の部屋に来る？」

「いいんですか？」

「そうよ。もう終わり。私の人生も終わりかも」

「どうしたんですか。何かあつたんですか？」

「話せば長いことながら」

「そうですか」

どう答えていいのかわからず、リーは黙つた。

「あーあ、最悪」

電話のむこうでユウコが言つた。

「酔つてますか」

「けつこうね」

「では、すこし夜風にあたりませんか。素敵な夜景でも見ながら」

「まあ、クレバーな提案」

ユウコは今度は電話のむこうでけらけらと笑った。

「大丈夫ですか。迎えに行きましょうか」

「馬鹿にしないで。私だって大人の女なんだから」

「じゃあタクシーに乗って、ピークカフェと言つてください」

「ピークカフェ？」

「かの有名な、100万ドルの夜景が見える場所にあるカフェです。ペニンシュラからなら、一、三十分で着くと思います」

「わかつた。じゃあ、ピークカフェで会いましょう。三十分後に」

電話が切れた。

「三十分後、か」

リーは通りかかったタクシーに手を上げた。

ピークカフェに着いて、店の中を見回してみたが、ユウコはまだ着いていないようだつた。リーはカウンターに座り、ビールを注文した。ビールを飲みながら、ぼーっと店の入り口を見ていると10分ほどしてユウコが入つて来るのがみえた。背は高くないが、バランスがとれた肢体。ふわりとした生地の、薄いグリーンのワンピースに白いセーターを羽織っていた。すごく似合ひうな、ヒリーは素直に思つた。

「お待たせ」

リーの隣にユウコが立つと、ウェイターがテーブルの間を滑るようにやってきて椅子を引いた。

「トーチエ」

ありがとう、と自然な広東語でウェイターに言つと、ユウコはリーの隣に腰を下ろした。ウェイターはカウンターの上にメニューを置くと、ユウコにつこりと微笑みかけ、再びテーブルの間を滑るように去つて行つた。

「こここのウェイターは正直です。いい女が来るとすぐにメニューを持つてきます」

「あら、そう

リーが言うと、ユウコがどうんとした目で見つめ返した。

「何にしますか」

リーはユウコにメニューを開いてやった。

「カーリスバーグでいいわ」

ユウコはメニューも見ずにビールの銘柄を口にした。リーはユウコイターを呼んで、ビールを注文した。

「まだ酔つてますか」

「うん」

「半島酒店（ペニンシュラホテルにいたのは、誰ですか」

「彼はね、日本で人気の大物ニユースキヤスター」

ウェイターがビールを持ってきて、二人は乾杯した。

「彼がね、来年から始まる大型ニユース番組のパートナーになる女子キヤスターを探しているわけ。その予備取材として、香港に行つてみないかと誘われて」

「それで香港に来てみると？」

「他のスタッフは誰も来ていなかつた。どういう意味かわかるわね」

リーは答えず、ただ黙つてビールを飲んだ。

「今夜はいちおう彼と一緒に食事に出かけたわ」

「そうですか」

「ねえ。その先どうなつたか、知りたい？」

その質問には答えず、リーは黙つて微笑んだ。するとユウコは自分から言葉を続けた。

「それとなく誘われた。でも断つた」

「それで相手は納得したんですか」

「してないでしちゃうね」

「僕もそう思います」

リーの正直な答えに、ユウコが笑つた。ひと息ついたユウコは周りのテーブルを見回した。テーブルはほとんど若いカップルで占められていた。見つめ合つたまま動かない一人もいれば、テーブルの上で指をからめ、愛の言葉を交換する男女もいる。

「幸せそうなカップルばかり」

ため息交じりにユウコが言つと、リーもあらためて周囲を見回した。確かに、若く、幸せそうなカップルが多かつた。

「地元の『ティー』ースなんです」

「私たちも端から見たら、ああいつ幸せそうなカップルに見えるかしら？」

「どうでしょうか」

「ねえリー君、どうして今夜はそんなに他人行儀なの？」

甘えるような口調でユウコが言つた。

「どうやって今夜は、その、誘いを断つたんですか」

ユウコの質問をばぐらかすようにリーが言つた。

「今晩いきなりじゃ、そんな気分になれません。そつ言つたのよ」

「それじゃ、今晩は大丈夫でも、明日は危ないんじゃありませんか」

「そうね……」

ユウコは一瞬下を向き眼を伏せると、再び顔を上げてリーの顔をまともにみた。

「リー君、どう思つ？ 私があいつと寝たら、あいつ、私をパートナーに指名するかしら？」

「どうでしようか。わかりませんね」

あまりにユウコにまともにみつめられ、今度はリーが眼をそらした。

「でも、僕だつたらこうことはしないな」

「そう？」

「一緒に寝た女が隣にいて、『コースを読むなんて……とても想像できない』

「そうよね。不謹慎よね」

「それに、そういう仕事のとり方では、売春婦と変わりないと僕は思つ」

リーは思いきつてユウコの顔を正面からみた。ユウコもみつめ返してきた。

「コウノさんは、仕事に困っているのですか？」「

「そうね……微妙などこかもしれない。女子アナって、若いうちはちやほやされるけど、やがて使い捨てになる運命だから」

コウノがそう言つからにはそなのだらう、とリーは思つた。

「ひょっとしたら今が、最後の売り時……」

コウノは潤んだ眼でリーをみつめてきた。

「ちょっと夜風にあたりませんか」

リーは席を立つとウェイターを呼んだ。「一言二言会話し、その場で勘定を済ませ、コウノをエスコートして外に出た。

すると外は白一色の世界になっていた。急に気温が下がり、霧が出たようだつた。香港の湿氣をはらんだ空氣は時たまにこういつ悪戯をしでかすのだ。

「あら……素敵ね」

「秋にはたまに、こういうことがあります。恋人たちにとつては好都合。何をしていようが、濃い霧のなかだと周りからは見えません」

「ちょっとだけ、私にも恋人気分を味あわせて」

リーに寄り添うようにしてコウノが言つた。寒いのか、体をぴったりと寄せてくる。

「いいかしら？」

と言つて、リーの腕をとり、自分の手を絡めてきた。

リーはコウノは恋人のように腕を組み、夜景のみえる展望台へとむかつた。

展望台へ着くと、霧が晴れてきた。霧の切れ間から香港の夜景がのぞいた。

「まだ100万ドルにはほど遠い。50万ドルぐらいかな」

リーが言つと、

「十分よ。これはこれで、十分にロマンチック……」

とコウノが顎を上げ、目を閉じた。リーはコウノの形のいい顎にそつと右手を添えると、やさしく、ゆっくりと浅いキスをした。途端にフラッシュがきらめいた。驚いた二人が光がきた方向をみ

ると、再び強いフラッシュが一度、二度とたかれた。

「しまつた。困ったことになりましたね」

二人の写真を撮ったと思われる人影をみきわめるようにリーは目を細めた。人影は、一人にさつと背をむけると、霧の中へ駆けて行つた。

「パパラッチかもしれない」

リーは霧の中へ人影を追つて駆け出した。

「待つて！」

ユウコが追いかけた。十メートルもいかないところでリーは立ち止まっていた。霧は深く、人影がどこに消えたかまったくみえない。

「パパラッチに狙われる覚えは？」

ふり向いたリーがユウコに言った。

「わからない……ないとは、言えない」

近頃の日本では女性アナウンサーがスキャンダル写真をねらい打ちされることが多いのだとユウコがリーに打ち明けた。

「そうですか……では、今の出来事を、例の人には言っておいた方がいいかもしませんね」

悔しそうな面持ちでリーが言った。

「僕のようなちんぴらと遊んでいるような写真が週刊誌に出たら、日本を代表するようなニュース番組のキャスターになるのは難しいかもしれない……」

「そうか……そんなこと、考えもしなかった」

腰に両手を当てるが、ユウコはちよつと悔しそうにハイヒールで地面を蹴つた。

「いちばん怖いのは、ニュース番組が始まつて、ユウコさんがキャスターとして活躍している最中に、こいつはスキャンダルがでてしまうことではありませんか？」

髪の毛をかきむしり、心の底から残念そうにリーが言った。

「そうね……それも、あり得る」

「申し訳ありません」

真っ白な霧のなか、リーは深々とユウコに頭を下した。

「いいのよ」

とユウコが言った。

「これで何か、ふつきれたといつか……あの人には今夜のことを正直に話します」

「ユウコさん……いいんですかそれで」

「あの人もこんな女にはきっと愛想を尽かすと思うわ」

「ごめんなさい」

リーは再び、ユウコに頭を下げた。その下あごに、ユウコの指がそっと差し入れられた。リーはその指に持ち上げられるようにゆつくりと顔を上げ、再びユウコと真向かいに向き合つた。

「ねえリー君。なんでさっきは私のキスを受け入れたの？」

「正直、あなたのことば前から素敵だと思つていました。好きだつたんです。とても僕とでは釣り合いませんが……誘惑に負けてしました」

「もう一度だけ、誘惑に負けてくれる？」

眼を閉じたユウコの顔が近付いてきた。リーはもう一度だけ、ユ

ウコのキスを受け入れた。それからユウコを、紳士の態度で半島酒ペニンシュラ^{ホテル}店までケーブルカーとタクシーで送り届けた。

一時間後、リーは再び、ピーカカフェのカウンターに腰かけて、憂鬱うみやくそうな顔でビールがくるのを待っていた。

「うまくいきましたか」

カールスバーグのドラフトビールが注がれたグラスをバーテンがリーの前に差しだした。ビールはよく冷えているようで、グラスが汗をかいていた。

「汗をかいたよ。このグラスみたいに」

リーはグラスを持ち上げて、カールスバーグを喉に流し込んだ。当然のようによく冷えていて、うまかった。

「わたしも汗をかきましたよ。なにせ、パラチの経験は生まれ

て初めてですからね」

リーよりすこし若いと思われるバー・テンは、きつちりと整髪料で真ん中から分けた髪を照れたように両手で整えた。

「でも、うまく撮れたと思いますよ」

バー・テンは後ろのポケットから小さなデジカメを取り出すと、リーが座るカウンターに置いた。

リーはデジカメを手に取り、ボタンを押して写真をウインドウに再生してみた。リーとユウゴがキスしている。確かに、ハリウッド映画のキスシーンを切りとったように、うまくフレーミングされていた。

「君、写真のセンスがあるね」

「おそれります」

リーは写真を送つてみた。次にディスプレイに出てきたのは、写真を撮られた直後、茫然としている男女の表情。三枚目は、不安げな表情のユウゴがリーの腕にしがみついている。スキヤンダル写真誌にとって、これ以上ないと思われるような組み合せだった。

「素晴らしい腕前だ。バー・テンを辞めても、君はパパラッチで食つていけるよ」

「ありがとうございます。で、その写真はどうするんですか？　本当にパパラッチみたいにマスクミにばらまくとか？」

「いやにやしながらバー・テンが言つた。

「いや。残念だけど、ここつらの役目は終わつたんだ。消してしまうことにするよ」

「そうですか……せめて個人の記念として残しておけばいいのに……いい女でしたね」

「ああ。本当にいい女だった」

残念そうに言つと、リーはデジカメのボタンを操作して、三枚の写真を消去した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3666m/>

香港の秋

2010年10月8日14時27分発行